

NEWS

開港のひろば

Number
64編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100発行日／平成11年4月28日(水)
印刷／中川印刷株式会社

当館閲覧室で読むことができる日記関係の刊行物

横浜は全国的にみても都市化の進んだ地域であり、歴史資料の散逸が著しい地域といわれています。しかし、丹念に調査を進めてみると、大量の古記録が旧家の土蔵などから見つかることがあります。当館では開館以来、こうした調査を積極的におこない、現在では十万点以上の古記録の所在が確認されています。古記録のなかにはさまざまなものが含まれ、時には歴代の当主が代々書き継いだ日記が出てくることもあります。

日記の内容は多種多様ですが、これらの中からつけての横浜の様子を具体的に知ることができます。特に、一九世紀以降になると、横浜に残された日記の数は飛躍的に増加し、多くの人がびとが日々の出来事を克明に記録するようになっていきます。その記述には公文書からは知ることのできないような庶民の動向や地域の歴史についてのものが多く、日

日記が語る 19世紀の横浜 —移りゆく時代の 証言者たち—

記は江戸時代や明治時代に生きた人の姿を再現するための貴重な文化遺産になっています。そのため、当館では日記を題材にさまざまな事業（出版や講座など）をおこなってきました。

今回の展示はこうした事業の成果を集大成したもので、所蔵者の協力を得て所在が確認されている日記を一堂に公開するものです。もちろん、展示だけでは多岐にわたる日記の内容を紹介しきれるものではなく、当館では展示開催をきっかけとして、これまでに出版してきた日記の史料集や日記を題材にした論文集などの利用が増加すればと考えています。

また、昨年度からは当館の出版事業として「日記史料叢書」の刊行も開始され、第一期として『佐久間權蔵日記』（この日記については次頁を参照）が翻刻されています。今後、さまざまな日記を「日記史料叢書」の中で紹介していく予定であり、やがては展示に出品した日記がすべて活字で読めるようになると期待しています。

なお、今回展示に出品した日記の内、以下のものは当館の閲覧室で活字で読むことができます。詳しくは閲覧室でお聞きいただければ幸いです。関口日記（宝曆二年～明治四年）、布川日記（明治二七年）、堤磯右衛門日記・懷中覚（万延元年～明治二〇年）、佐久間權蔵日記（明治十六年、同四三年）、町会所日記（明治三年～同四年）（西川武臣）

日記が語る19世紀の横浜

—展示に出品した日記の中から—

関口日記

関口日記は、現在の鶴見区生麦に居住していた関口家の歴代の当主が五代にわたって書き継いだ日記である。もっとも古い日記は宝暦一二年（一七六二）のもので、明治三四年（一九〇二）までの約一四〇年間、ほとんど毎日のように記述がある。

彼らが日記を書き続けたのは家の経営を記録し後代の参考にするためであり、さらには結婚葬祭などの交際の覚書や村役人としての公務記録として日記を利用するためであった。もちろん、彼らは後世の人びとが日記を歴史史料として利用するとは考えていなかったが、日記が残されたことによって、我々は一軒の農家が江戸時代から明治時代という時代をどのように生き抜いたのかを具体的に知ることができるようになった。

このように貴重な日記が世に出たのは今から四〇年以上前のことである。その後、この日記は横浜市の貴重な歴史史料として注目を浴びるようになり、現在では当館の書庫に保管されている。

また、昭和四六年（一九七二）からは横浜市教育委員会が日記の翻刻を開始し、すべての関口日記が活字で読めるようになった。こうして関口の人びとの暮らしが現代の我々の前に再現されることになった。



関口日記

特に、二代藤右衛門の娘である千恵が結婚・出産した時の記事や江戸城の大奥に奉公にあがつた時の記述は、農村女性の人生を伝える数少ない史料といわれている。また、三代東作が記した日記からはペリー来航から横浜開港にかけての庶民の動向を具体的に知ることができる。さらに、四代東右衛門が記した日記は戊辰戦争から明治時代に入つてからの村の近代化の歴史を我々に教えてくれる。

（西川武臣）

日記を記したのは初代藤作、二代藤右衛門、三代東作、四代東右衛門、

五代昭知の五人で、二代以降の日記は記述も詳しいものとなり、その内容も金銭出納から家族の動向、村の事件や村人の生業まで、さまざまに事件が記されている。

特に、二代藤右衛門の娘である千恵が結婚・出産した時の記事や江戸城の大奥に奉公にあがつた時の記述は、農村女性の人生を伝える数少ない史料といわれている。また、三代東作が記した日記からはペリー来航から横浜開港にかけての庶民の動向を具体的に知ることができる。さら

に、出来事、公務や家事向き、交際に加え、日々の思考や感概をとどめた極めて私的な記録といえる。

佐久間家は、東海道筋の、また鶴見川河口右岸に接する交通の要衝たる鶴見村の代々名主を勤めた旧家。五代権蔵の長男に生れた。明治十六年（一八八三）に家督を相続、のちに村会議員、郡参事会員、県会議員など公職を歴任し、昭和九年（一九三四年）に七十三歳で死去した。

（西川武臣）

現在日記は、明治十六年、同四十三年（昭和九年）（うち大正一・九・十三年が欠）、全二十三冊が残っている。佐久間家の十六代当主となつたその年から死までの、権蔵の一代をカバーする心象記録といえる。日記簿は義兄の恵投によると書いている。日記帳は、大蔵省印刷局製、B5版大の「当用日記簿」。他には博文館や春陽堂発行の「当用日記帳」で、読めるようになつた。こうして関

口の分が失われていることだ。

佐久間権蔵日記

当館では、市域地方名望家の日記として、数年前から佐久間権蔵と飯田助夫（北綱島）各日記の翻刻刊行の準備を進めてきたが、その最初に

『佐久間権蔵日記』第一集（明治十六・四十三年）を近く刊行する。十

六歳のかねとの結婚、家督相続、若き日々の友人との談論風発、読書、農作業、葡萄の栽培、それから五十

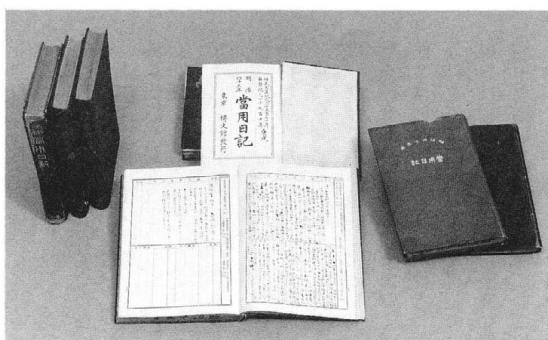
歳となり、母との死別、電灯の導入、総持寺放光堂の地形始め、消防組の組織、村議や宅地賃貸価格調査員、

大洪水とその復旧、開けゆく地域の変貌を記録して興味は尽きない。

最後に、古文書・記録から蔵書まで一切の家蔵資料を寄贈され、日記の刊行を快く承諾して下さった佐久

間亮一氏に、深く感謝したい。

（佐藤孝）



佐久間権蔵の日記

布川日記



布川日記の著者
布川悦五郎（右側）

布川日記は、金利谷小学校の教員六浦荘村収入役・同助役・同村長を歴任した布川悦五郎の日記で、悦五郎のご子孫の家に伝存したものである。日記の著者である悦五郎は明治四年（一八七二）に武藏国久良岐郡宿村（現在、金沢区）に布川家の次男として生まれた人物で、大正三年（一九一四）に亡くなっている。

彼が日記を記すようになったのは明治二〇年（一八八七）のことである。金利谷小学校で教鞭をとるようになってからであった。その後、彼は毎日のように日記を書き続け、現在残っている日記は明治二〇年の日記のか、二一年、二七年、二八年、二九年、三二年、三三年、三八年、大正三年の九冊である。

また、これららの日記は現在その他の記録とともに悦五郎のご子孫の家に保管され、当館では昭和二年に日記のマイクロフィルム撮影をおこなっている（なお、このフィルムをもとに作成した日記の複製は当館閲覧室で読むことができる）。

日記の内容は多岐にわたるが、金利谷小学校の教員時代の日記からは、當時の小学校教育の実態や名望家の家庭に生まれた青年がさまざまな知識を吸収しながら小学校の教員として成長していく様子をうかがうことができる。

また、この時期の日記には、しだいに「近代化」していく村の生活が



布川悦五郎の日記

宿村（現在、金沢区）に布川家の次男として生まれた人物で、大正三年（一九一四）に亡くなっている。

彼が日記を記すようになったのは明治二〇年（一八八七）のことである。金利谷小学校で教鞭をとるようになってからであった。その後、彼は毎日のように日記を書き続け、現在残っている日記は明治二〇年の日記のか、二一年、二七年、二八年、二九年、三二年、三三年、三八年、大正三年の九冊である。

また、これららの日記は現在その他の記録とともに悦五郎のご子孫の家に保管され、当館では昭和二年に日記のマイクロフィルム撮影をおこなっている（なお、このフィルムをもとに作成した日記の複製は当館閲覧室で読むことができる）。

日記の内容は多岐にわたるが、金利谷小学校の教員時代の日記からは、當時の小学校教育の実態や名望家の家庭に生まれた青年がさまざまな知識を吸収しながら小学校の教員として成長していく様子をうかがうことができる。

郎のご子孫の家に伝存したものである。日記の著者である悦五郎は明治四年（一八七二）に武藏国久良岐郡宿村（現在、金沢区）に布川家の次男として生まれた人物で、大正三年（一九一四）に亡くなっている。

彼が日記を記すようになったのは明治二〇年（一八八七）のことである。金利谷小学校で教鞭をとるようになってからであった。その後、彼は毎日のように日記を書き続け、現在残っている日記は明治二〇年の日記のか、二一年、二七年、二八年、二九年、三二年、三三年、三八年、大正三年の九冊である。

また、これららの日記は現在その他の記録とともに悦五郎のご子孫の家に保管され、当館では昭和二年に日記のマイクロフィルム撮影をおこなっている（なお、このフィルムをもとに作成した日記の複製は当館閲覧室で読むことができる）。

日記の内容は多岐にわたるが、金利谷小学校の教員時代の日記からは、當時の小学校教育の実態や名望家の家庭に生まれた青年がさまざまな知識を吸収しながら小学校の教員として成長していく様子をうかがうことができる。

飯田助夫日記は、旧橘樹郡北綱島村（現在の港北区綱島）で江戸時代名主をつとめた飯田家の一二代目当主助夫が、明治から昭和戦後期にかけて、公務を中心とした日々の記録を綴った日記である。

明治一年（一八七八）に生まれた助夫は、病弱にもかかわらず長寿を全うし、昭和三六年（一九六一）八三歳で亡くなった。飯田家には、明治三五年（一九〇二）から昭和三三年（一九五八）までの五三冊の日記が残され、飯田助知氏（孫で現当主）により大切に保管されている。

飯田家には、このほかに江戸時代からの古記録が伝存し、現在神奈川県立公文書館に保管されて学術的に高い評価を得ている。飯田助夫日記が翻刻されれば、こうした記録といままで、地域の近代史をさらに明らかにできるものと思われる。

（吉良芳恵）



飯田助夫の日記

飯田助夫日記は、旧橘樹郡北綱島村（現在の港北区綱島）で江戸時代名主をつとめた飯田家の一二代目当主助夫が、明治から昭和戦後期にかけて、公務を中心とした日々の記録を綴った日記である。

明治一年（一八七八）に生まれた助夫は、病弱にもかかわらず長寿を全うし、昭和三六年（一九六一）八三歳で亡くなった。飯田家には、明治三五年（一九〇二）から昭和三三年（一九五八）までの五三冊の日記が残され、飯田助知氏（孫で現当主）により大切に保管されている。

飯田家には、このほかに江戸時代からの古記録が伝存し、現在神奈川県立公文書館に保管されて学術的に高い評価を得ている。飯田助夫日記が翻刻されれば、こうした記録といままで、地域の近代史をさらに明らかにできるものと思われる。

ロッシュの個人書簡

前回の企画展示「山手の丘の赤隊・青隊—幕末維新の横浜英仏駐屯軍」では、さまざまな方のご協力をえて、多くの新しい史料を紹介することができた。ここではその新収史料の中から、フランス公使ロッシュ(Leon Roches)の書簡を取り上げてみたい。

五通の個人書簡



ロッシュ (アンペリ城美術館所蔵写真より)

ロッシュは、一八六四年四月にド・ベルクール(G.D.de Bellecourt)の後任として来日した駐日フランス公使で、その後、幕府よりの政策を積極的にとったことで知られる。

右に掲載した写真は、幕府軍の洋式軍制化指導のため六七年に来日したフランス軍事顧問団団員、デシャルム(J.L.Descharmes)騎兵中尉の史

料におさめられていたものである。当館では展示直前に、ロッシュより外務省の同僚、フォジエール(Faugere)に宛てた五通の書簡を入れ手した。この同僚はまた、書簡の内容から、古くからのごく親しい友人でもあったことがわかる。書簡は一八六年から六六年にかけて書かれたもので、このうち、一

八六年一〇月一七日付書簡を出陳した。

書簡には、ロッシュの日本着任時から同年一〇月までの日本国内の情勢、九月の下関遠征参加にいたるまでの過程、幕府とフランスとの間の友好関係について記されていた。

残りの四通の書簡も、多くが日本

の情勢や自分の外交活動について述べるものであることから、このフォジエール宛て書簡はたんに友人宛ての個人書簡とどまらず、外相宛ての公式報告書を補足する目的で書いたものと考えられる。

たとえば六四年一〇月一七日付の書簡に記されている、「外相閣下にこの書簡をお見せし、わたしの熱意と献身同様、わたしの思慮にたいしても十分に信頼をおいてくれるよう再度、伝えてもらえないだろうか」という一文からもわかる。

オールコック召還を知つて

この書簡中でもっとも興味深い箇所は、追伸である。

「(一八六四年)一〇月一八日、郵

便船がいまや出航しようという時に、オールコック召還を伝える電

信を受け取った。この決定はこの専門知識によつてもたら

された諸事とその尽力からすればまったく不当な決定であり、オールコックが叱責を受けたその政策

が生んだすばらしい成果を傷つけたものである。かれは大筋において書かれたもので、このうち、一

て好戦的で、とくに外務省への報告中でそうであったことは認める

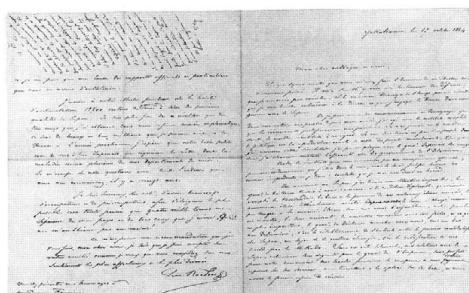
が、実行にうつす段階になると、無謀なことはしなかった。わたしはかれ以上に立派で忠誠心のある同僚を知らない。かれの召還は日本にとって大きな損失である。わたしは、われわれのこの好ましい立場を維持できるよう一層の努力をおこないたい」。

しかしイギリス本省から、独断的行動をとったとして事實上の解任を意味する帰国命令を受け、パークス(H.S.Parkes)と交替することになつた。

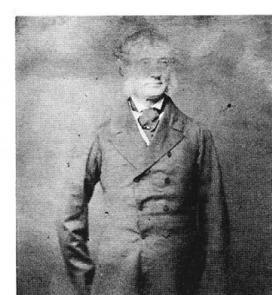
ロッシュは、一〇月一七日付書簡の発送直前に、このオールコック帰國命令を知つたのである。そして、それがいかに理不尽な決定であるかを憤り、前述のような追伸となつた。それは同僚のオールコック擁護のためばかりでなく、下関戦争に加わったロッシュ自身の正当性をも擁護するための言葉でもあったと考えられる。

さて、オールコックの強硬政策を支持しなかつた当時のイギリス本省の政策とはどのようなものであったのか。

イギリス外相ラッセル(J.Russell)が、下関遠征を主張するオールコックに宛てた次に紹介する六四年八月一八日付訓令にそれは示されている。



ロッシュの書簡



オールコック (個人蔵「バーカー旧蔵アルバム」より)

ための軍事行動でもあつた。



イギリス軍の砲台占領
(ペアト撮影)



イギリス軍の前田砲台占領 (ペアト撮影)

「將軍は、長州藩主のとった敵対的な行動にたいして、懲罰を加える意図があることを公式に表明しており、また、貴下の呼び寄せたイギリスの陸軍部隊の兵舎の建設を、可能なかぎり迅速な方法ですすめている。これらの点を考慮すると、貴下は、長州藩主にたいして敵対的な行動に出るよう、キューパー提督〔(A.L.Kuper) イギリス海軍の中国海艦隊司令長官。引用者注〕に要請すべきでなく、貴下、および、イギリスの陸海軍部隊の指揮官の注意は、もっぱら横浜の防衛に向けられるべきであるといふのが、イギリス政府の見解である」（秋原延壽『遠い崖』2、朝日新聞社、一九九八年）。

「貴トがジョレス提督(C.Jaures フランス海軍の中国・日本海艦隊

一方、ロッシュは、フランス外相、ドルアン・ド・リュイ(E.Drouyn de Lhuys)からどのような訓令を受けているのだろうか。フランス外務省もイギリス同様、日本での戦争は回避するようにという訓令をあたえていた。

次に紹介する六四年一〇月一〇日付のロッシュ宛て訓令はその方針の遵守を求めていた。



フランス海軍提督ジョレス (Le Monde illustré) (1864年2月20日号)

この訓令は下関遠征実施を知られる以前に書いたものであるが、すでにこの時点では遠征は実施されていた。

その後、下関遠征が連合艦隊側の勝利をおわったこと、ついでその後なお、ロッシュの五通の書簡は、あらためて別の機会に全文紹介する」としたい。（中武香奈美）

ラッセル外相は、この中で横浜に駐屯していたイギリス陸海軍部隊についても言及し、その目的はあくまでも横浜居留地防衛のみとし、イギリス全軍の武力行動を禁止した。しかし、この訓令到着前にオールコックは遠征を実施したのである。当時、日本とヨーロッパ間の交通は片道二ヶ月を要した。

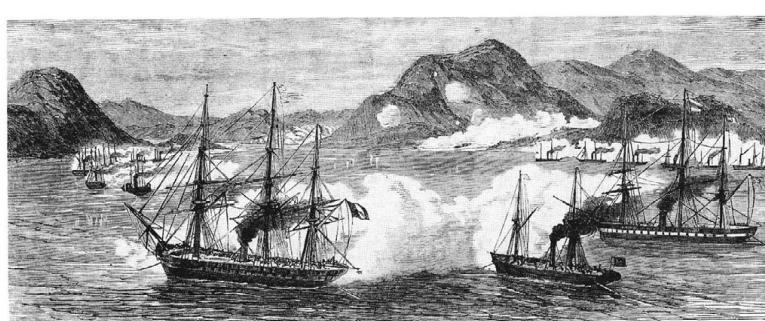
遠征実施を知ったラッセル外相は、先に述べたように、事実上の解任命令である帰国命令をオールコックに出すに至った。

フランスの対日政策

書簡中で決議文（四カ国の公使が決定した下関遠征参加の取り決め）をかれに認めさせることに躊躇していないが、この決議文はフランス政府からわが艦隊司令長官にも、そして貴下自身にたいしても出されている訓令に明白に矛盾するものである。出先が（本国とのあいだの）距離の隔たりが大きいからといって、明らかに提示されている本國の政策方針を放棄する権限をもつことは認めない」。



イギリス海軍提督キュー (個人蔵「バーカー旧蔵アルバム」より)



下関戦争を伝えるフランスの絵入り新聞 L'Illustration (1864年12月31日号)

司令長官)にたいしてイギリスがまさに企てようとしていた挑発的な軍事作戦に積極的に参加するようを要請したため、このような回状（ロッシュの要請を受けたジョレスが、海軍省に判断を仰ぐために送った報告書）となつたのである。貴下はジョレス提督に宛てた

状況（ロッシュの要請を受けたジョレスもオールコック同様、本省の政策に反した行動をとったわけであるが、召還命令といったものは受け取っていない）。

ロッシュもオールコックは離れた後であった。

野沢屋支配人 金兵衛の「年頭廻り」(1)

横浜最大の貿易品であった生糸は、季節商品である。五月ごろ飼育した蚕が繭を結び、その繭から糸を挽くことから、新糸は六月ごろから出回る。横浜の生糸商は、取扱高を確保する必要から生糸地に店員を派遣し、生糸出荷の約束をとりつけてまわった。これを「年頭廻り」という。ここで紹介する記録は、横浜最大の生糸商であった野沢屋（茂木惣兵衛）の支配人鐸木金兵衛の年頭廻りの記録「道中日記」である。記述は、明治八年（一八七五）六月の記録も入っているが、とくにここでは、翌九年（一八七六）五月六日よりの「信濃行控」と題した部分を取り上げる。

鐸木金兵衛は、上野国碓氷郡小日向村（現群馬県松井田町）に弘化二年（一八四五）九月六日に生まれた。もとの姓は穂積であったが、明治五年に鐸木に改姓した。父孫二は、座元の縫製糸の改良家であった。相沢墓地に残る金兵衛の墓碑には、金兵衛が明治一九年（一八八六）四月十一日に四二才で病没したこと、金兵衛の茂木商店への貢献は、十九年にわたることが記されており、金兵衛の茂木入店が明治初年、二三才ころであることがわかる。

金兵衛の道中日記は、金銭出入とそれにからんでの日々の行動が簡単な記された部分（五月六日～六月二十一日～五月二七日）とに分かれている。相互に重複し、詳細な内容は読みとりにくい。しかしこの明治九

の支配人鐸木金兵衛の年頭廻りの記録「道中日記」である。記述は、明治八年（一八七五）六月の記録も入っているが、とくにここでは、翌九年五月六日よりの「信濃行控」と題した部分を取り上げる。

鐸木金兵衛は、上野國碓氷郡小日向村（現群馬県松井田町）に弘化二年（一八四五）九月六日に生まれた。ほとんどの姓は穂積であったが、明治五

信州佐久にて

金兵衛は、五月六日帳場から五〇円を受け取り、横浜をあとにし、八日に高崎に入った。二日間休息したのち、十一日に下仁田へ行き宿泊。翌十二日には長野県佐久に入った。

道中日記

道中日記の裏見返し 湾北区郷土歴史館

横濱辨貳
茂木店

翌一四日、金兵衛は前山村から南下し、白田村（現白田町）百足山様に立ち寄り昼食を喫したのち、宿岩村（現佐久町）を訪問し、さらに「馬越中山君」を訪ねた。

横浜開港直後、野沢屋を開店した野沢庄三郎に、茂木惣兵衛を紹介したのは、惣兵衛が青年時代養子に入っていた上州桐生の新井家と取引關係にあった南佐久郡千代里村馬越（現八千穂村）の生糸商兼絹物太物商、中山浜次郎であった。惣兵衛が野沢屋を継承したのち、浜次郎は横浜に家を構えて、野沢屋から佐久の本家を守る子供たちに手紙をもって生糸・人参・米などの販売を細かく指示し、横浜の商況を伝えた。惣兵衛とほぼ同世代で、惣兵衛の死の半年後に生涯を終えた浜次郎は、茂木商店の「取締役」「幹事」「実際考課状」明治一七年・一八年と記録され、惣兵衛にとって創業以来の盟友の存在と思われる。一四日金兵衛はこの中山家に泊まつたのである。

茂木恒太郎や中山浜次郎の例からも、野沢屋・茂木商店の人脈には、生糸にとどまらない、他の取扱商品にかかる側面を無視できない。また中山のように人参荷主が生糸荷主であることも、製糸業が未成熟の段階ではありえたのである（山形県の生糸兼ハッカ荷主の事例は、前掲「茂木惣兵衛」を参照）。

翌一五日金兵衛は、浜次郎の長男中山彦輔同道で、「岩村田阿部氏」など佐久の諸村を訪ねた。昼食は

6

「黒沢にて」喫したのち、人力車で小諸へ、さらに上田に入った。

長野県為替方彰真社

以上みてきたように、佐久の「年頭廻り」の記述は、具体的な内容に乏しく、行き先のみに終始している感がある。が、これまで金兵衛が訪問してきた人物たちには、特定の意味があった。

明治新政府の為替方を三井組・島田組とともに担っていた小野組は、

明治七年（一八七四）十一月に破綻した。佐久・小県地方は、生糸・絹物・太物・酒などの商売を通じて、京浜地方との為替利用が多かったが、長野・筑摩両県の為替方をつとめていた小野組の破綻により、金融的利便を失ったのである。これに先立ち、明治六年七月に横浜を本店として設立された第二國立銀行は、八月には

高崎・上田の支店設置が許可された。が、貿易不況もあって、発足当初第一國立銀行は資本金目論見額の四分の一である二五万円で出発せざるを得なかつた。佐久地方の金融利便を企図して、中山彦輔も株主の一人に名を連ねている

が、結局上田支店は開業されなかつた。

このような金融閉塞の事態に對して、佐久地



鐸木金兵衛（左）
明治8年（1875）ころ撮影
港北区鐸木實氏蔵

なった。その中心となつたのは、黒沢鷹次郎・中山彦輔・早川重右衛門ら十一名で、「彰真社」を結成し、長野県為替方事務取扱を申請した。

黒沢鷹次郎は明治九年六月一日、金兵衛の佐久訪問の半月後に長野西ノ門町に開業している。社長は早川重右衛門で長野本社に常勤し、上田出張所は中山彦輔が、東京出張所は黒沢鷹次郎が事務取扱となつた。

十三日金兵衛が「為替方社長早川様方」を訪ねたが長野出張で不在であったことは、このよう彰真社設立直前の多忙な時期であつたことに理由がある。佐久での金兵衛の行動と、「種々御詫し」の内容は、生糸や人參の出荷約束とともに、この彰真社Ⅱ為替会社設立にからむものであつたと判断して差し支えないであろう。それは次の次第によつても明らかである。

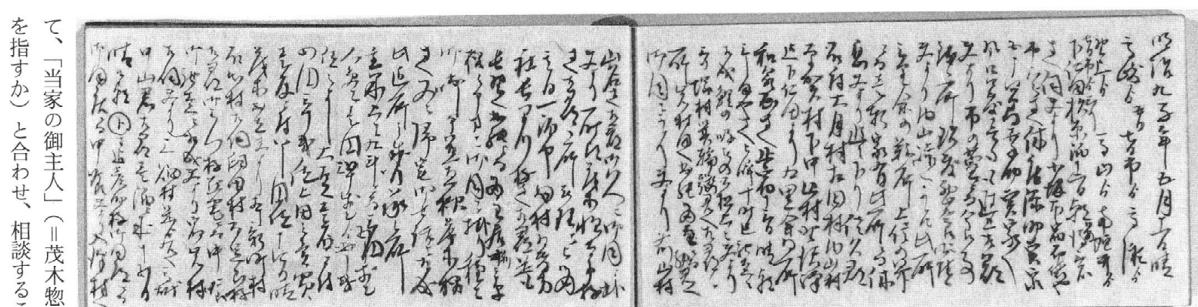
上田に入った金兵衛は、一八八〇年五月十一日には、「原町会社進上 茶一斤」とあるよう、茶を手みやげに生糸改会社に立ち寄つたと思われる。そして「今日市中御得意方へ残らず廻る」翌一九日は休みであったが、長野より〔高次郎様〕店へ御立寄にて下拙を尋ね、六月一日為替店開店二付当地生糸渡世得意方御尋向ニ付同日当家の御主人様御為合申し、種々御相談仕り候事」とある。屋号が不明であり、文意も明瞭でないが、〔高次郎〕は、黒沢鷹次郎のことであろうか。

いすれにせよ、六月一日の彰真社開店に際し、生糸の得意先訪問について、当家の御主人（＝茂木惣兵衛を指すか）と合わせ、相談すること、

と決した、との意味であろう。「為替店」として彰真社が道中日記に記録されているのはわずかこの部分だけであるが、佐久・上田訪問の意味がうかがえよう。彰真社の社員は以下のとおりである。

早川重右衛門／黒沢伴次郎／阿部万五郎／阿部弥惣太／中山彦輔／黒沢利左衛門（鷹次郎父）／出浦敬三／倉石吉左衛門／前島清次郎／竹内幸四郎／箕輪鼎

『長野県史』通史編近代一、昭和六年刊）



道中日記の行動記録 明治9年（1876）5月11日からの記載

彰真社の主要メンバーは、より強力な金融機関の設立を企図して、翌明治〇〇年（一八七七）十一月には、上田に第十九國立銀行の設立を実現し、佐久・小県のみならず、のちに諏訪の製糸金融にも大きな地位をしめるようになる。また第十九國立銀行創立には茂木惣兵衛も大株主として参加している（彰真社・第十九國立銀行については、『八十二銀行史』昭和四年刊、を参照）。地方金融機関である彰真社の結成に、横浜の茂木商店がどのように関与し、推進させたかは、金兵衛の道中日記の記述を超えるものである。今後の研究課題としておきたい。（続く）（道中日記と彰真社結成との同時性を指摘されたのは、中山浜次郎のご子孫である長野県中野市在住の山田静雄氏である。ご教示と資料の提供に、厚くお礼を申し上げる次第である。）（平野正裕）

閲覧室から

**旧家に残された
新聞・雑誌 1**

横浜開港資料館では、横浜市内・市外の旧家に残された近世・近代の文書を収集し、原史料および複製を公開しています。近代の文書のなかには、新聞や雑誌も含まれており、それらの新聞・雑誌から所蔵している人々が何に関心を寄せていたのかをうかがうことができます。また、地域に密着した興味深いもののみられます。

今年度は、そのなかからいくつかを紹介します。はじめに、比較的多くの教育関係雑誌を見てみましょう。請求番号を〔 〕で示しましたのでご覧ください。

【学事報】

児童の父兄、あるいは小学校の所在する村の村民に対し、一年間の学校教育、社会教育に関する報告をしたもの。学校の沿革や他郡市他府県の状況、父兄に対する要望を記載したものもみられる。

学校教育の報告には、各小学校での就学状況、出席状況、学校当局の異動、行事も含んだ教授、施設、訓育、衛生、予算、職員修養などの教育活動の記述がある。また、当時の小学校では、実業教育と同時に小学校教育の補習を行う実業補習学校が併設され、加えて昼間学校に通えない児童のために夜間の教育を行っていたことがわかる。

そして、社会教育の記述では、小学校が各村の青年会や婦人会といった社会教育に関する各種団体の拠点となっていたことがわかる。

ガリ刷りで、内容や体裁には各学校の特色を感じられる。例えば、尋常金利谷小学校のものはイラスト入りの二段組で読みやすい。同校では職員が駿金して毎月六、七種類の幼年少年雑誌を購入し、児童に回覧していたことも報告されている。

当館では次の小学校の『学事報』を見ることができ。

金沢小学校 明治四四年六月
尋常富岡小学校 明治四四年六月
〔金沢区 鹿島市太郎家文書 学校関係九〕
10.2./31]

尋常金利谷小学校 大正二年六月、

大正三年六月
尋常高等三分小学校 大正二年六月
〔三町〕

〔金沢区 布川隆義家文書 Ca5/10.2./31〕

久良岐郡尋常高等日野小学校 大正二年六月
〔港南区 田野井儀明家文書 刊本一二〕
尋常高等森中原小学校 大正四年五月
〔磯子区 斎藤清四郎家文書 Ca5/09.2./42〕

(上田由美)

資料だよ館



▲横浜「ものの始め」「こと始め」について内外歴史資料に基づいて、通説に実証的な批判を加え、豊富な図版を用いてわかり易く解説。巻末に便利な件名・人名索引も。

A4版188頁 本体価格2,000円
当館・受付と通信販売でお買い求めになれます。

[通信販売]

横浜開港資料館にて申込（はがき、電話、FAX、いずれも可）

〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地

TEL. 045-201-2100 FAX. 045-201-2102
※料金後払い、送料別途（大量の場合着払い宅配便）

※公費支払いの場合書類等は相談に応じます。

臨時休館日等のお知らせ

展示設営及び燻蒸、資料整理のため、次の日は臨時休館させていただきます。（毎週月曜日（5月3日を除く）は通常の休館日となります）。

展示室	平成11年4月27日(火)・5月6日(木)・5月7日(水)・8月3日(火)・9月24日(木)・11月2日(火)・11月24日(木)・平成12年1月4日(火)・2月8日(火)
-----	--

閲覧室	平成11年4月27日(火)・4月30日(金)・5月6日(木)・5月7日(金)・6月29日(火)・7月2日(水)・8月3日(火)・8月31日(火)・9月24日(金)・9月30日(木)・11月2日(火)・11月24日(火)・11月30日(火)・平成12年1月4日(火)・2月8日(火)・2月29日(火)～3月3日(金)・3月31日(金)
-----	--

次の日は、祝日の翌日にあたりますが、開館いたします。

展示室	平成11年4月30日(金)・7月21日(火)・9月16日(木)・11月4日(木)・12月24日(金)・平成12年2月12日(火)
-----	--

閲覧室	平成11年7月21日(火)・9月16日(木)・11月4日(木)・12月24日(金)・平成12年2月12日(火)
-----	---